

Title	新城總長
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1929), 9(97): 221-223
Issue Date	1929-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161403
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

天 界

第九十七號

(第九卷)

昭和四年四月

新 城 總 長

本誌前號に報じた如く、本會名譽會員理學博士新城新藏教授は、京都帝國大學々内の衆望を擔つて、いよいよ總長に就任されることになつた。吾吾は何よりも先づ双手を舉げて之れを喜び、滿腔の熱誠を以つて同博士と同大學の將來多幸ならんことを祝ひ、且つ祈るものである。

新城博士の總長になられたのは、言ふまでもなく同博士の「學と徳と」が大學内外の衆望を得た結果であるが、吾々永く博士の薰陶を受けた者は、親しく其の「學と徳と」を知つてゐるものであつて、此の點に於いて、博士の就任は、吾々には人一倍の深き喜びであり、實に吾がことの如く大なる誇りを感じる。

天文學者にして大學總長になつたものは東西古今に例が多くない。しかし現代の吾々は今アメリカに於いて二つの例を知つてゐる。一は米國アイオワ州デモイン市のドレーク大學總長 D.W. モアハウス博士であり、他の一例は同國カリフォニア大學總長 W.W. カンベル博士である。自分は先年外遊の時、幸ひ此の兩總長に共に接した光榮を有つ。モアハウス總長は1908年に出現したかのモアハウス彗星の發見者であつて、當時ヤーキース天文臺の一臺員であつたが、1922年推されて總長になつた。しかし、總長になつてからもやはり天文研究は念頭を去らないらしく、現に自分等が1923年九月の皆既日食を觀測するため暫く西海のカタリナ島に滞在した時、モアハウス總長も亦數人の同志と共に此の島に来て、同じリグレイ・キャンプの生活を共にしたものである。大きい體驅の持ち主で、一見豪放粗野なヤンキー

タイプであるが、人に接するには極めて温情に富み、やさしく、あかるく、總ての友を喜びに溢れしめる魅力を有し、一方に於いて又、熱心と獨創に富む學者肌である。更に、カンベル博士に至つては、人も知る如く、米國新學の先驅キーラー教授の後繼者として、ミシガン大學より出でて早くリク天文臺長となり、今世紀の初頭より、恒星のスペクトル研究と其の視線運動の觀測とに精進して、此の方面に於いてリク天文臺の名を全世界に重からしめ、尙ほ皆既日食の觀測を全地に試みて、實に「日食の主」たるあだ名と呼ばれるに至つた。更に世界大戰後は、全アメリカ天文學會々長及び國際天文同盟の頭首に歴任し、實に現代天文學界の重鎮を以つて多くの人に目せられる身であつた。去る1923年春、濠州の日食觀測遠征を終へてカリフォニア大學に歸り、アインシュタイン原理の確實な證明を發表するや、まもなく同大學總長に推され、「リク天文臺長の地位を兼ねたまゝ」この條件の下に就任したことは、かつて本誌にも記した所である。今日、カリフォニア大學と其のリク天文臺はカンベル博士の下に、益々名聲を擧げつゝある。

わが新城博士は、實に京都帝國大學に於ける天文研究の開拓者であつて、つぎに大宇宙の物理學的探究に志し、1910年頃から、大氣の光線屈折問題緯度變化問題、流星と其れの關連する諸問題、乃至、變光星の諸理論に關する多くの論文を發表し、更に一方に於いて東洋古代の天文學史研究に歩を進めて茲に二十年。至る所、他人の及ばざる新論の開發と討究とによりひろく世人の畏敬の的となりつゝある。今や博士の學術研究は益々圓熟の境に入らんとし、更に又、學術研究會議や、東邦文化事業委員會や、文部省測地學委員會等を通じて博士の手腕は愈々發展せんとする際であるから一朝にして之れを帝大總長に擧げることは、純學術研究上、可なり惜しまれるべき事柄である。しかし、大學の行政は博士の出現によつて期待さるべき幾多のものがあることを思ひ、吾人はむしろ此の際博士の總長就任を大に慶賀するものである。

因みに、こゝに新城博士の略歴を記さう。

新城新藏博士略歴

明治6年(1873年) 八 月20日、福島縣會津若松市に誕生
 同 25年(1892年) 七 月、仙臺の第二高等學校卒業
 同 28年(1895年) 七 月、東京帝國大學理科學卒業
 同 (同) 七 月、同 大學院に入り、物理學一般を研究
 同 30年(1897年) 九 月、陸軍教授(砲工學校教官)となる
 同 33年(1900年) 一 月、築城本部御用掛兼務
 同 (同) 六 月、京都帝國大學助教授理工科學大學
 同 34年(1901年) 十一月、東京帝國大學理科學大學講師を兼ね
 同 38年(1905年) 一 月、私費を以つて獨逸國に留學
 同 40年(1907年) 十 月、歸朝して、京都帝國大學理工科學大學講師囑托
 同 (同) 十一月、京都帝國大學理工科學大學教授
 同 42年(1909年) 五 月、總長推薦により理學博士の學位を受く
 大正8年(1919年) 五 月、米國へ出張、同十二月歸朝
 同 9年(1920年) 二 月、高等官一等
 同 年(1921年) 十一月、學術研究會議天文學部副部長
 同 12年(1923年) 七 月、第2回汎太平洋學術會議のため濠洲へ出張
 同 年(1923年) 十二月、京都帝國大學理學部長
 同 14年(1925年) 三 月、勳二等
 同 (同) 十二月、願により理學部長を免す
 昭和3年(1928年) 八 月、從三位
 同 4年(1929年) 京都帝國大學總長

(山 本 記)

京都帝國大學天文台の近狀

新城首席教授は總長に擧げられ、上田荒木兩助教授は海外へ留學せられ、あきに残された山本教授は新任の竹田助教授や上島講師と共に雜務を處理してゐるが、目下、花山には新天文台の建築工事が進みつゝあるし、又、大學構内には理論天文學の建築が進みつゝある。それに尙ほ今は學年の始め終りの仕事が多い。山本氏等は又、日蝕觀測旅行準備に忙殺されてゐる。——實に御盆と正月とが十づゝも一時にやつて來た忙しさである!!